座談会

—「臨床研究てらこ屋 in ふくしま」を振り返って—

「臨床研究てらこ屋 in ふくしま」セミナーは、東日本大震災後、福島の地で医療に取り組んでいる若い医師たちを応援すべく、2012年1月から3月までの間、毎月1回、福島県立医科大学で開催されました。
セミナーでは座学の講義だけでなく、グループ実習や発表、抄録のブラッシュアップなどの具体的な学習を通じ、受講者の臨床研究への取り組みを支援しました。
セミナー終了から約５ヵ月を経たこの８月、受講者やファシリテーターの方々にお集まりいただき、セミナーの体験を振り返りつつ、今後の展望を語っていただきました。

ニックネームで呼び合うセミナー

福原　本日は、「臨床研究てらこ屋 in ふくしま」セミナーに参加された皆さんのご感想やご意見をおうかがいます。まず、本セミナー参加の動機をお聞きしたいのですが……。あれ、「べそっこ」先生の本名は、なんとおっしゃるのでしたっけ？

羽賀　「べそっこ」で結構ですよ（笑）。

福原　「てらこ屋」では、皆さんが親しくなって本音でお話しできるよう、あえて先生とは呼び合わずにニックネームを使っているので、うっかりお名前を忘れて失礼しました。羽賀先生でしたね、なぜ「てらこ屋」に参加を？

羽賀　私は、所属する泌尿器科学講座では排尿関係の基礎研究をしており、臨床研究の経験はほとんどありませんでした。そんな折、「てらこ屋」が開催されると聞き、ぜひ勉強してみようと参加しました。と言いますのも、２年間ほど臨床現場でデータを集めており、なんとか論文にして世に公表したいという夢があったのです。

福原　岩渕先生には、以前にも京都で開催された「てらこ屋」に参加していただきましたね。

岩渕　はい。１年ほど前に京都のセミナーを受講させていただいたときは、どのようなセミナーなのかもわからず行ってしまったのですが、講義に夢中になりました。
　ただ、まだまだ知識が不十分なままでセミナーを終えてしまったような思いが残り今年もセミナーがあれば絶対に行こうと思っていた矢先、当地でセミナーが開かれる知らせを聞き、ここぞとばかりに参加させていただきました。

福原　京都でのセミナーをそれほど気に入っていただけたということは、これまでの臨床研究を学ぶ機会とはずいぶん異なる印象を持たれたのですか？

岩渕　大きく違いました。今までも各診療科横断的な講義をライブ中継などで勉強をしましたが、テーマが研究論文の書き方や臨床研究に関する倫理の問題だったので、「てらこ屋」のような系統的な学習に衝撃を受けました。

福原　本セミナーは毎月１回土曜日午後に３ヵ月連続で開催しましたが、全講義に参加していただく厳しい条件がついていました。土曜日は研究会や医局の行事が目白押しで、毎月１回でもセミナーに時間を割くのは、スケジュール調整などご苦労をおかけしてしまったのではないかと心配しています。

岩渕　確かに仕事のやりくりは必要でしたが、それほどたいへんとは思いませんでした。セミナーに参加すれば得られる貴重な知識もありますし、講義も非常に楽しいものでした。

福原　岩渕先生のモチベーションの高さは私にも明らかでしたよ。何しろ、最前列の真ん中の席に座って、目をキラキラさせながらかぶりついていらしたので（笑）。

教える側にも好影響が

福原　本日は受講者の方以外にも、「てらこ屋」では先輩にあたる、整形外科学講座の大歳先生と、松尾先生にもご参加いただ

福島県立医科大学医学部
整形外科学講座大学院生
松尾 洋平

福島県立医科大学医学部
整形外科学講座助教
大歳 憲一

福島県立医科大学医学部
泌尿器科学講座助教
羽賀 宣博

福島県立医科大学会津医療センター
準備室・整形外科准教授
岩渕 真澄

京都大学大学院医学研究科
医療疫学分野教授
福原 俊一

いています。

本セミナーは講義とともにグループワークも実施しましたが、お2人にはそのファシリテーターを務めていただきました。受講者ではなく、ファシリテーターとして加わっていかがでしたか？

大歳　自分で学ぶときとくらべて、人に伝えることの難しさがわかりました。それに自分の知識がしっかりしていなければ人にも教えられないので、さらに自分も勉強するモチベーションになったと思います。

松尾　お手伝いの役割で参加したので、ある意味、客観的に講義を眺められたと思います。以前に受けたことのある内容でも、あらためて外側の立場で聴くと「そうか、こういうことだったのだ」と、もう一度確認できる経験ができました。

将来は「屋根瓦式」の実現を

福原　ところで、受講直後は高揚感もあってやる気がありますが、2～3週間もたつと日常診療に忙殺されて意欲が下がってしまったのではないでしょうか？

羽賀　おっしゃるとおり一時は意欲がしぼんでいたのですが、新しく着任した教授が非常にバイタリティにあふれる方で、「福島発で何か研究を」と我々に発破をかけるので、再度、エンジンがかかっています。

今、福島には原発事故後の低線量被曝問題があり、これを泌尿器科の切り口から世界に発信できる情報を出せたらと、研究デザインを設計しているところです。

福原　それは何よりです。我々も、今後とも福島のお役に立つ機会を提供したいと思います。

岩渕　頻繁に全員が集まるのは難しいので普段は遠隔教育で継続的な学習機会をいただく一方、年2回ほど合宿のように皆で集まり、我々がリサーチ・クエスチョンをもとにつくった構造化抄録を、福原先生をはじめ専門の先生方に相談し指導を仰げれば何よりです。

福原　なるほど。本セミナーでも「7つのステップ」に分けて研究計画を立てることをお伝えしましたが、たとえば各ステップがおわった段階で短時間でも個人指導などができれば、ということですね。

我々の力だけでできるか厳しいですが、受講者の先生方にもがんばって勉強していただき、やがて後進の先生方に指導するような「屋根瓦式」の仕組みができれば、福島発の良質な臨床研究論文がもっと生まれるのではないかと期待しています。

グループ発表は学会にも勝る

福原　大歳先生、松尾先生には、私が実施した厚生労働省科学研究臨床研究基盤整備推進事業で、臨床研究を大学院で学べない方のために遠隔学習とスクーリングを組み合わせた「臨床研究コア・コンピテンシー遠隔学習プログラム」にもご参加いただきました。

遠隔学習とスクーリングを組み合わせたプログラムはいかがでしたか？

大歳　スクーリングはたいへん濃密な時間で、自分で予想していた以上にメンターの方からご指導をいただき、想像もしていなかったような視点から考える機会を得られました。

松尾　遠隔学習だけですと、どうしても受け身の部分が出てきますが、たとえ年に数回でも実際に会えるとなると、モチベーションの維持にもつながります。

福原　このプログラムのスクーリングにおいて、皆が一堂に会し、各グループが発表して意見を出し合う時間は、すばらしいものでした。私はさまざまな学会に出席しますが、下手な学会よりずっと建設的な議論が可能と感じました。

福島でもそういった機会を設け、ご自分の研究計画をプレゼンしていただき、そのあとで少しゆっくりと皆で議論する場を設けるのも良さそうですね。

本日は、お忙しいところお集まりいただき、どうもありがとうございました。

この連載は、認定NPO法人 健康医療評価研究機構（iHope International）が主催した「臨床研究てらこ屋 in ふくしま」の内容の一部を、同法人の許可を得て掲載したものです。